

# 環境問題におけるモノと科学技術へのアプローチについて

東京都市大学 大塚善樹

## 1 目的

環境問題は自然物を含むモノと人間が相互作用する場で生じ、その問題の認識や解決には自然科学の方法論が適用される場合が多い。本テーマセッションの中心的な理論であるアクターネットワーク理論（ANT）は、モノが人間に対して及ぼす変化を重視し、かつ自然科学的な認識を相対化することから、環境問題への社会的アプローチとして有望に見える。しかし、環境社会学の分野で、ANT が言及されることは殆どない。そこで、環境社会学ではこれまでモノと自然科学的知識や科学技術をどのように扱ってきたのか、ANT の視点から環境問題に取り組むにはどのような問題があるのかを考察する。その考察を通して、環境問題への社会的アプローチに、モノと人間を同格のアクターとみなす新たな視座を導入する可能性を検討する。

## 2 方法

これまで日本の環境社会学で形成されてきた主要な理論として、被害構造論、受益圏・受苦圏論、生活環境主義を選び、その代表的な研究成果において、モノと科学技術をどのように扱ってきたのかを検討した。次に、ANT の基本的な立場である、社会構築主義的な説明をしない、自然科学的な説明の多数性を前提とする、そしてモノと人間を同格のアクターとして記述する、以上3点を基準として、被害構造論、受益圏・受苦圏論、生活環境主義を比較した。さらに、最も ANT との親和性が高いと思われた被害構造論について、詳しく ANT との異同を検討した。最後に、被害構造論から環境問題を扱う際に前提となる倫理的な問題意識の観点から、ANT を倫理化する可能性について、技術倫理学や政治学の先行研究に基づいて考察した。

## 3 結果および考察

被害構造論は、その名称とは異なって、所与の社会構造を前提とするものではなく、公害や労働災害の被害の現場でのフィールド調査から、被害の様相をモノとの関係を、それらの形象化の問題性も含めて詳細に描き出してきた。その過程で、専門家の自然科学的知見とは異なる被害やモノの多数性に出会っている。結果として得られる被害構造は、環境問題の専門家や行政には見えない被害を、明るみに出すための地図となるものである。そのような意味で、既にある構造的な社会的格差を前提とする受益圏・受苦圏論はもちろん、人類学的・民俗学的なアプローチである生活環境主義よりも、ANT との親和性は高いと考えられた。しかし、被害構造論における被害の現場への着目は、被害者へのコミットメント、そして加害責任の明確化と被害者の救済という、倫理的な問題意識に支えられていた。これに対して、ANT では、エージェンシーはモノと人間の相互作用の結果とされ、責任を伴う行為の倫理的側面が捨象されてしまう。

環境問題への社会的アプローチにおいては、真正性を主張する科学的知識の形象化に伴う負の側面を批判するだけでなく、被害のリアリティに基づいて、よりよい科学的知識や科学技術の可能性を構想することが必要であると考えられる。そこで、相対主義的な ANT に何らかの倫理性を導入する可能性を考えよう。たとえば、モノと人間の相互作用としてのエージェンシーが倫理的な主体であり、モノもまた人間と同様に倫理的配慮の対象となるとみなすことである。そうすると、エージェンシーが多様な科学技術によってどのように変化するのかを ANT の方法で記述することが、科学技術について倫理的判断を行う材料となり得ると考える。